

〔実践報告〕 ジェンダーギャップの現状を知り、 新たなライフスタイルを考える家庭科の授業

—新たなライフスタイルを創る附中ライフイノベーション（家族・家庭生活）—

原田 悦子* 中西 正善** 山根 真理*

1. はじめに

現在、世界は貧困、差別、気候変動、資源の枯渇など人類は数多くの課題に直面している。急速な変化を伴う社会を生きていく子どもには、生涯にわたって持続可能な社会を構築する一員として、より豊かな人生を歩んでほしいと考える。そのためには、既存・既習の知識や考えを活用するだけでなく、新たな視点を取り入れたり、それまでとは違った角度から発想したりして、自ら生活や技術を工夫し創造することが必要となる。そこで技術・家庭科では、実践的・体験的な活動をとおして、生活や社会で利用されている技術についての基礎的な理解を図る。そして、それらの技能を身につけるとともに、生活や社会の中から問題を見だし、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて、生活や技術を工夫し創造しようとする態度等を育成することが必要である。子どもが協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築、技術との関わり等の視点から生活を見つめる段階では、身のまわりの生活や既存の技術を見つめて、解決すべき問題を明らかにする。よりよい生活を実現させるために、子どもの生活経験や既有知識を社会に結びつけたり、ものづくりをとおして技術の有用性を感じたりして考えられるようにする。考えを深める段階では、生活の営みや技術の見方・考え方をはたらかせながら、問題に対する情報収集、状況判断、意思決定、解決策の実行といった一連の学習において、仲間と考えを共有しながら問題を解決する力を養う。そして、仲間の解決策のよさに目を向けたり、導き出した解決策を問い直したりしながら、意見交流によって複数の視点で議論し、検討を重ね、更なる解決策を導き出す。このようにして仲間と共に導き出した解決策を生活に広げる段階では、設計をもとに製作したり、これまでの学びをまとめて他者と交流したり、外部へ発信したりすることで、身につけた生活の営みや技術の見方・考え方をはたらかせ、生活や技術を工夫し創造した力を活用できるようにする。そして、生活や技術を工夫し創造し続ける子どもは、持続可能な社会を構成する一員として、より豊かな人生を歩んでいく。

*愛知教育大学家政教育講座

**愛知教育大学附属岡崎中学校

2. 授業構想

2.1 単元名

新たなライフスタイルを創る附中ライフイノベーション (家族・家庭生活)

2.2 本単元で目指す姿

ジェンダーギャップの現状から、これからの働き方や家族のあり方について見直すことで新たなライフスタイルを形成し、よりよい生活の実現に向けて動き出す子ども

2.3 本単元で育む資質・能力

- ・男性育児休暇取得率や結婚離職率に着目して問題を見いだす力
- ・問題の解決策を構想し、取材やアンケートをとおして具体的に検証する力
- ・仲間と考えを交流する中で多面的・多角的に吟味し、評価・改善する力
- ・自分と家族、家庭生活と社会との関わりを考え、家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする力

2.4 教材について

本単元では、男女格差の大きい日本の働き方に着目し、これからの働き方や家族のあり方について考えていく。2021年3月、世界経済フォーラムが発表した「ジェンダーギャップ指数」の日本の順位は156カ国中120位であり、先進国では最下位、多くの新興国・途上国より低い順位であった。職場における賃金と雇用形態の格差や、マタハラやパタハラによる育児と仕事の両立の難しさ、海外と比べた日本の働き方のジェンダーギャップの大きさを追究して問題意識をもつ。払拭しきれない日本の風習の中で、日本のライフスタイルについて考えることをとおして、新たな働き方や家族のあり方を模索できる教材である。

2.5 子どもの思い・考え

生活を見つめる段階で、子どもは、結婚後の働き方の変化について考える。働き方を考える中で、海外の企業を見てみると、「性別関係なく自分に合った仕事ができる」ことや「ライフワークバランスのとれた家庭生活を送れる」ことを知る。しかし、企業や自治体への取材や調べ学習をとおして日本の社会を見つめると、多くの男女格差が社会に根強く残っており、海外との違いに気づく。また、ジェンダーギャップの事例を見て振り返ると、多くの子どもが「男は仕事、女は家庭」という概念を自然にもってしまっていると語る。そして、根強い慣習の中で、「日本のライフスタイルに合った働き方とはどのようなものだろうか」という問題を見いだす。考えを深める段階では、子育て世帯への働き方支援を行っている企業や大学教授、市役所、一般家庭など、さまざまな立場や視点から、日本のライフスタイルに合った働き方はどのようなものかを追究する。働き方支援について考えた子どもは、企業や自治体への取材をとおして、フレックスタイム制や男性育児休暇を100%取得できる

制度をもつ企業や、自治体からの子育て支援の取り組みについて知る。ライフワークバランスについて考えた子どもは、大学教授や家庭での取材をとおして、仕事と家事の分担やバランスのとり方など、仕事と家事育児の両立に必要なことを探る。そして、多様な働き方と家族との協力によって新しい時代に合ったライフスタイルの形成がジェンダーフリーにもつながるという価値を見だし、共有する。それをもとにした新たなライフスタイル「附中ライフイノベーション」をつくり、提唱しようとする。生活に広げる段階では、深める段階で共有した新たな価値をもとにして附中ライフイノベーションをつくり出す。つくり出した附中ライフイノベーションを企業や自治体、SNSに発信し、評価を得る。そしてこれからも変わり続ける社会の中で、よりよい生活の実現に向けて動き出す。

2.6 単元構想表 (14 時間完了)

段階	主なてだて	思い・考え	
生活を 見 つ め る	<p>対象を見つめる場を設定する 日本のジェンダーギャップの現状を見つめ、問題を見いだせるようにする</p> <p>対象について調べる場を設定する ジェンダーの視点をもちながら、さまざまな立場から働き方を見つめ、問題を見いだせるようにする</p>	<p>夏目三久さんが結婚して引退する</p> <p>共働きの家庭が多い</p> <hr/> <p>結婚後、共働きと片働きのどちらを選ぶか</p> <p>1~2時</p> <p>子どもと一緒に過ごす時間を大事にしたい。大きくなったらパートをすればよい</p> <p>日本の女性は結婚離職率が高い。男は仕事、女は家庭という風習がある</p> <p>海外の働き方はジェンダーフリーになっていて子育てしながら働ける環境だ</p> <p>日本の働き方の現状はどのようなものか</p> <p>3~6時</p> <p>母親が子どものそばにいないから働くことが理想だが、難しい現状がある</p> <p>育児休暇取得率は、男性が8%、女性が83%と大きな差がある</p> <p>終身雇用の考え方があり、正社員で働く人を優遇している</p> <p>長時間労働の中では子育てとの両立が難しく、退職せざるを得ない</p> <p>核家族が増え、共働き家庭が増加しているのに、男女の役割が変わっていない</p> <p>企業は長期休まれてしまうと困ってしまうから育休を快く受け入れられない</p>	
考 え を 深 め る	<p>取材やアンケートを推奨する これからのライフスタイルについてさまざまな立場から考えられるようにする</p> <p>【意見交流】 ○子どもからの提案をもとに合う場を設定する ○共有シートを用いて考えを推奨する場を設定する</p>	<p>企業が変っていくだけでなく、自分たちの考えも変えていかなければならない。 日本のライフスタイルに合ったこれからの働き方とはどのようなものか【問題】</p> <p>7~10時</p> <p>家で子育てをしながらでも働くことができる方法を考えよう</p> <p>QOLを上げ、収入を保ちたい。今の仕事を続けられる働き方を考えよう</p> <p>海外のような子育ての環境が十分に整っている国内の企業を探してみよう</p> <p>正規雇用にとこだわらず、働きたい時に働くという選択肢が必要である</p> <p>男女の所得格差がある。所得格差の是正が家事分担の平等につながる</p> <p>男性育児休暇取得率100%の企業がある。この支援制度を広めるべき</p> <p>フレックスタイムは労働時間を自由に裁量でき、家庭のことができてよい</p> <p>ジェンダーギャップのない教育が必要で、ジェンダーフリーが常識になるとよい</p> <p>新しい働き方を紹介し、発信することで、多くの企業に広がっていくとよい</p>	
生 活 に 広 げ る	<p>まとめを発信する場を設定する これからの働き方について提案力をこれからの生活につなげるようにする</p>	<p>男女格差のないことが常識となる新たなライフスタイルを築くことが働き方にとって大切だ。新たなニッポンのライフスタイル、附中ライフィノベーションを提案したい</p> <p>11~14時</p> <p>家族で助け合い、お互いを尊重し合うことが新たなライフスタイルとなる</p> <p>ジェンダーギャップのない家庭生活を送ることで、新たな風習をつくる</p> <p>託児サービスや雇用形態の拡充を更に多くの企業に進めてもらいたい</p>	<p>家庭の仕事を見直し、家族で協力し合っ て過ごしていきたい</p> <p>生活のジェンダーフリーについて更に考 えてみよう</p>

3. 授業実践

3.1 結婚後、共働きと片働きのどちらを選ぶか

結婚後に退職を選択する人がいることや、共働きの家庭が増えているというニュースを見たA子は、結婚後の働き方についての話し合いで「子どもが小さいときは片働きでよい」と述べた。そこで教師は、日本のジェンダーギャップの現状を見つめ、問題を見いだせるように、ジェンダーギャップ指数と海外企業の働き方の資料を提示し、対象を見つめる場を設定した。A子は、日本のジェンダーギャップ指数が低いのは、日本の社会は女性にとって働きにくい環境になっているのが要因ではないかと考えた。学級で意見を交わす中で、日本の社会は“男は仕事、女は家庭”という風習が強く根づいているという考えが共有された。A子は、なぜ日本の社会は海外と比べて仕事と子育ての両立が難しいか知りたいと考え、日本の働き方の現状を見つめ始めた。

3.2 日本の働き方の現状はどのようなものか

A子は、女性が仕事と子育てを両立することが本当に難しいことなのか調べた。すると、パタニティハラスメントによって男性は育児休暇が取りづらいことや、家庭内での家事分担の男女の偏りがあることがわかり、“男は仕事、女は家庭”の風習が社会に強く根づいていることを再認識した。しかし、実際に働いている方の声を聞かないとわからないとも感じていた。そこで教師は、ジェンダーの視点をもちながら、さまざまな立場から働き方を見つめ、問題を見いだせるように、対象について調べる場を設定した。A子は、家庭内の家事分担に関するアンケートを作成し、保護者に調査して分析した。

その後、A子は、調査したことをもとに仲間の声を交流したくなったため、仲間の意見を聞き合うことにした。A子は、「共働きをしても女性が家事を一人で支えている」とアンケート結果を根拠として、家庭の家事分担の現状について意見を述べた。その後、学級では仲間の「ライフスタイルに合わせた働き方ができるように企業が変わらないといけない」や「一人一人が風習への考えを変えていかないといけない」という意見が共有された。A子は、日本の女性が無意識に家事は女性がやるものと思っていることや、多くの男性が育児休暇を使用したくても、職場の環境によって、断念し、育児に参加できないという現状は間違っていると考えた。そして、「日本のライフスタイルに合ったこれからの働き方とはどのようなものか」という問題を見だし、追究を進めた。

3.3 日本のライフスタイルに合ったこれからの働き方とはどのようなものか【問題】

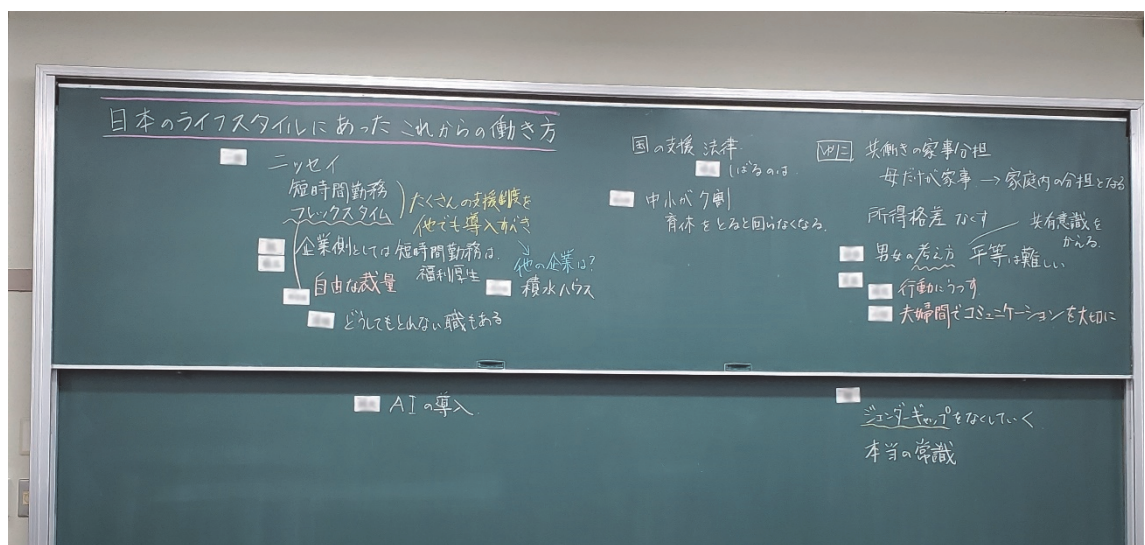
教師は、これからのライフスタイルについてさまざまな立場から考えられるように、取材やアンケート収集を推奨した。A子は、夫婦のハウスワークバランス（家事分担）をどう行っていくのがよいか考えた。そこで、大学教授に取材し、所得の多い方が家事育児をしない傾向があると聞いた。そして、専門家の意見を取り入れ、「所得格差を是正すべきだ」とい

う考えをスライドにまとめた。教師は、自分の考えを表現したり、他者の考えに耳を傾けてフィードバックしたりすることができるように、子どもからの提案をもとに話し合う場を設定した。B男の「フレックスタイムを導入する企業を広げてはどうか」という提案に対してA子は、「フレックスタイムは労働時間を自由に裁量できてよい」、「男女の所得格差の是正が家事分担の平等につながる」と述べた。また、仲間からは、「男女の考え方の違い

子どもからの提案や議題をもとにした意見交流の授業記録（一部抜粋）

- B男：フレックスタイム制で仕事と家事の両立ができ、6年連続男性育児休業取得率ナンバーワンの企業がある。これからのライフスタイルのためにフレックスタイムを広げてはどうか。（提案）
- C男：賛成だが、他の企業だと難しい。
- D男：正社員同士給料が同じなのに、コアタイムとフレックスタイムで給料が同じなのはどうか。
- A子：フレックスタイムはすごくいい。労働時間を自由に裁量できれば家庭のことができる。男女の賃金格差の是正が家事分担の平等につながる。
- E子：所得格差の他に考え方の違いも関係している。男性は仕事で偉くなることに価値があると考え、女性は家のことを完璧にすることに価値があると考え。だから難しい。
- F子：生物学的に男女差があるが、赤ちゃんのときは考え方に差がない。成長過程で変わっていくから、教育や家庭環境を変えてジェンダーフリーにしていく必要がある。
- A子：小学校や中学校で男女の平等について教育をしていくとよい。

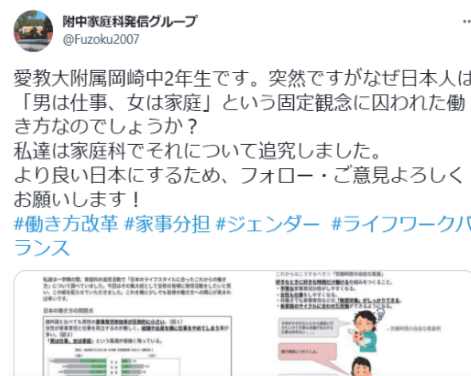
も関係している」、「教育や家庭環境を変えてジェンダーフリーにしていく必要がある」という意見が出された。A子は、「小学校や中学校で男女の平等について教育をしていくとよい」と話した。



意見交流後、教師は、自他の考えを見つめながら更なる解決策を導き出せるよう、共有シートを用いて考えを推敲する場を設定した。A子は、男女格差のない新しい意識をつくるべきとまとめた。そこで新たな意識をつくれるよう、ライフワークバランスのもち方を社会へ提案したいという思いを抱いた。

3.4 新たなニッポンのライフスタイル、附中ライフィノベーションを提案したい

教師は、創造した力をこれからの生活につなげられるように、学びで世の中に広めたいことを企業や自治体、SNSに発信する場を設定した。A子は、労働時間を自由に裁量できる仕組みをつくることや、家族が思いやりながら家事を一緒に行っていくことがよいと、学びをSNSに発信した。そして、単元まとめでは、「まずは私たちが家庭内の新しい意識をつくりたい」と自分自身のこれからのライフスタイルへの展望を語り、よりよい生活の実現に向けて歩み始めた。



学びをSNSに発信